

第32号
2015年 11月 1日

○発行
650-0004
神戸市中央区中山手通
7丁目25-38
神戸真生塾広報誌編集係
TEL (078)341-5897
FAX (078)341-8239
E-mail:kouhou@kbshinsei-j.org

○振替口座
郵便振替01100-8-18680

納涼大会を終えて

残暑がまだ残る八月の終わり、保護者の方々や、地域の方々、また各関係機関の方々、退所児と多くの来客者を出迎え、沢山の笑顔と沢山の笑い声が聞こえる中、今年も納涼大会を開催致しました。

始まりは、毎年恒例の乳児院の子ども達と、養護の幼児の子ども達によるパレードでした。ドラえもん、御神輿を一生懸命担ぎながら、沢山の方々に見守られながら、立派に開始のセレモニーをやり遂げる事が出来ました。その後は引き続き乳児・養護の子ども達による踊りも披露してくれました。曲目は「アパンマン音頭」と「ポップンポップコーン」で、子ども達は一生懸命リズムに合わせて踊りながら踊る事が出来ていました。

昨年、年長の子どもの踊りを見ながら真似て踊っていた子どもが、年齢が一つ大きくなって、今年はお手本のお手本になっており成長を感じると共に、遅い姿を見る事が出来ました。また、今年の納涼大会も沢山の中学生の子ども達が率先して、様々な役割を担ってくれました。お祭りの進行役を行ってくれた中高校生の男児二名は、初めてながらも立派に進行して

くれ、スムーズにステージを進める事が出来ました。ステージでも、中学生の男児四名による200の「思い出がいっぱい」を披露してくれました。緊張も見られましたが、いつもは皆の前で何かを行うという事がほとんど無い子ども達も、お客様が沢山いらっしやる中、自分たちの歌声を披露する姿を見て、子ども達にとっても良い経験となり自信に繋がった事と思います。女の子も沢山参加しており、

高校生の女児三名がバンドを結成し本当に立派なステージを繰り広げる事が出来ておりました。ギターとキーボード、ボーカルと本格的なバンドとなっており、夏休みの時間を使って日々練習を行っておりました。三名の内、二名が今年度で神戸真生塾を巣立っていく子ども達で最後の納涼大会に何か思い出になる様な事をしたと子ども達からステージに出る事を決心してくれ、無事終える事が出来、子ども達にとって最高の思い出になった事と感じます。

他にも小学生女児によるダンスも、多くの方の感動を生むことが出来ました。今回のダンスは、高校生の女児が小学生の子ども達にダンスを教える事とな

り、この夏休みダンスの練習に取り掛かっていきました。始めは、「難しいから無理!!」と言っていた子ども達も、練習を重ねる事で、次第に踊れる様になり、踊ると言う事が楽しくて仕方がない程になりました。難しい振付けにも挑戦しており、どの子ども達も最後まで諦めずに練習に参加し、見違えるほどの上達に驚く程でした。ハッピー☆ガールズと命名し、当日はダンスを教えてくれた高校生の女児が衣装や髪型もアレンジしてくれ、本当に格好よく、且つ可愛らしい姿に大変身し、踊る子ども達も照れながらも嬉しそうな表情を浮かべておりました。ダンスも堂々と踊れており、鳴り響く拍手と共に、一度のアンコールを引き起こし、多くの方に見て頂く事が出来ました。子ども達にとっても大きな自信と、頑張る力をダンスから学び得たと思えます。



他の子ども達も出店のお手伝いを行っており、お祭りを盛り上げる役を頑張っている姿が見られました。また毎年お世話になっている、長寿会の方々や、ポルトワイズの方々、山の手小学校のPTAの方々も多くの方のご協力もあり、今年の納涼大会も無事終える事が出来ました。今年「ハルモニアとたけちゃん」というバンドの方にもステージに特別出演して頂いたり、本当に多くの方々のおかげでいるのだと、改めて感じる場ともなりました。



最後になりましたが、多くの方々に日頃の感謝を伝えると共に、皆様の支えの上で、子ども達は日々元気に健やかに育っております。今後とも神戸真生塾の子ども達の事を温かく見守って頂きたいと思っております。ありがとうございました。
(高砂 優香子)



児童養護 神戸真生塾 琵琶湖キャンプ

神戸真生塾の『夏』と言えば琵琶湖キャンプ！

今年も昨年に引き続き、乳児院から子ども六名職員三名が参加し、子どもと職員合わせ、総勢六十五名で二泊三日間行ってきました。琵琶湖に入り泳いだり水遊びをするのはもちろん、ボートに乗ったり、琵琶湖に流れ込んでいる川で魚を捕まえるのに夢中になったり、ペットボトルで作った船を浮かべてみたり、発想豊かに思い思いに琵琶湖を満喫していました。その他にも、普段は見られない程の虫の多さに上機嫌になりながら綱や手でも虫を捕まえ草むら走り回り、時にはボールで遊んだり、スイカ割りをしたり、お昼の時間は飛ぶように過ぎていきました。



夜も楽しいプログラムがいっぱいです。パーベキューにキャンプファイヤーに肝試し。ここでは、高校生のお兄ちゃんたちが大活躍してくれました。パーベキューでは小さい子たちが先に食べられるよう暑い中一生懸命食材を焼いてくれたり、キャンプファイヤーでは、職員と一

緒に出し物をしてみんなを笑わせ盛り上げてくれました。そして、肝試しではお化けの役をしてくれ、とても上手に脅かしてくれるので、小学生の子ども達は大絶叫。泣き出す子どもも続出でした。泣いた子たちも、終わってみれば「あれ、〇〇君やったやろ〜？」と言ったり「楽しかったあ」と言う子もいました。恐怖に打ち勝ち、きつと一回り大きくなったことと思います。そして、高校生の子どもの達の手伝ってくれる優しさや、成長を嬉しく思いました。そして、今年も、夕食のカレーを班に分かれて自分たちで作りました。トッピングの食材



を班で相談して選んだり、野菜を可愛く切ったりいろいろな工夫をこらしました。同じルーを使っているにも関わらずそれぞれの班で全く違う味のカレーが完成しました。どの班もとても美味しくでき、全てきれいに食べきりました。

少し雨が降ることもありましたが、大きな事故や怪我もなく、無事全てのプログラムを行うことができました。

普段とは違う大自然の中で、伸び伸びと皆と一緒に過ごす時間は子ども達にとっても職員にとっても毎年貴重な経験となっています。楽しみを共有すること、協力すること、相手を思いやること、いろんな大切なことを実感できたキャンプになっていけばいいと思います。

(正木 陽子)

児童養護施設連盟バレーボール大会

八月二十七日中央体育館で行われた、第二十三回神戸市児童養護施設バレーボール大会に参加しました。

大会は夏休み中だったので、施設の納涼大会のダンスの練習と重なってしまったり、中高生もアルバイトや部活で忙しかったため、なかなかバレーボールの練習をすることが出来ませんでした。メンバーもほとんどが小学生で、人数もギリギリだったので全員がほぼフルセットで出場しなければなりませんでした。

大会前日の最後の練習では、全員が揃って練習でき、やる気満々で、明日は頑張ろう！と気持ち一つにしていました。そして当日、会場に行くと、会場の雰囲気は圧倒されてしまい緊張している子どもも。圧倒されながらも応援に来てくれたたくさんの子どもの声援に助けられながら、一生懸命ボールを追いかけたり、中高生中心に声を出してくれておりみんな本当によく頑張りました。



まず、予選リーグの二試合は両方負けてしまいました。負けてしまつて悔しい気持ちもありましたが、課題もたくさんみつかり「今年は練習できなかったから、ちゃんと練習しないと！」「こうした方がいいんじゃない？」「来年はスパイクを打てるようにしたいな」など今年の経験を活かして来年こそは勝ちたいという闘志が漲っていました。子ども達が今回の大会を通して確実に成長している姿を見ることができ、私たち職員も一緒に練習を頑張ろうという気持ちになりました。

(越智 奈美穂)

中高生デイキャンプ

七月二十七日～二十九日までの三日間、子ども達は琵琶湖キャンプに行き、夏の思い出を作りました。しかし、子ども達の中にはアルバイトとキャンプの日程が重なったり、部活動の大会でどうしてもキャンプに参加出来なかった子ども達もいました。

そのような中高生の子ども達を連れて、八月十八日に淡路島のイングランドの丘へデイキャンプに行ってきました。

イングランドの丘へは神戸真生塾の車を使って行きました。中高生になるとそれぞれの用事が忙しく、遠出でどこかに遊びに行く機会がなかなかないので子ども達はドライブだけでも楽しそうな様子でした。子ども達も持つてきたお気に入りのCDを流しながら目的地まで向かいます。



イングランドの丘に到着すると子ども達はすぐに園内マップを見始めます。「ここに行きたい」「ここは何がある?」と子ども達同士や職員と話しながら期待に胸を膨らませます。

コアラ館・各種アトラクション・体験教室等様々な見学・参加施設がありました。ゴーカートやスワンボートに乗った子ども達は本当に楽しそうな笑顔で楽しんでいたので印象的でした。

体験教室ではキャンドル作り・風鈴の絵付け等がありましたが、子ども達は満場一致でアイスクリーム作りを希望しました。出来上がったアイスクリームを実際に食べるのですが、溶けたアイスクリームが手についてる姿もまた印象的でした。



普段は年少の子ども達のお兄さん・お姉さんとして小さい子どもの見本となるように頑張っていたり、職員と話することよりも一人でいることを好むようなクールな雰囲気でも生活している中高生たちですが、今回のデイキャンプでのアトラクションやアイスクリーム作りを笑顔で楽しんでいる様子を見て、普段とはまた違う無邪気な姿を感じることが出来ました。私達職員にとっても、夏休みの思い出がまた一つ増えたデイキャンプでした。また来年も中高生の子ども達と一緒に楽しめる機会を持てたらと思います。

(安西 陵)



クリーン作戦

暑い日差しの中、クリーン作戦を実施しました。

「子ども会」とは、幼児から高校生の代表有志の子ども達と職員四名とで形成されています。この「子ども会」のメンバーで話し合いの場を設け、様々なことを計画しています。

今回のクリーン作戦は、子どもと職員を五つの班に分け、各班ごとに分担箇所を定め施設内や地域周辺の清掃を行いました。

各班とも下は三歳の未就園児から上は高校生の子どもがおり、下の子の面倒を見たり、普段は別の部屋で生活している子ども達が開く良い時間になったと思います。また、「こんなにも落ちていたよ」と一生懸命ゴミ拾いをしたり、真っ黒になった雑巾を持って来て「ピカピカに

なったよ」と報告してくれる子ども達は、とてもたくましく感じられました。

清掃後は、中庭に集まりみんなで昼食をとりました。メニューは、子ども会のメンバーで考えた焼きそばです。頑張つて掃除した後のご飯は格別で何度もおかわりをし、青空の下賑やかな昼食となりました。

クリーン作戦を終えた子ども達から「きれいになって気持ちいい」と感想を聞くことが出来、嬉しく感じました。

今後子ども達と職員が一緒になって何か一つの事を行える企画を「子ども会」のメンバーで話し合い、企画して実行していきたいと願っています。

(中本 歩)



(中本 歩)

乳・養交流バーベキュー大会

社会福祉法人神戸真生塾の敷地内には児童養護施設神戸真生塾と真生乳児院が隣同士に並んで建っています。

クリスマスや納涼大会、琵琶湖キャンプなど施設としての大きな行事はもちろんです、児童養護施設の庭で乳児院の子ども達が遊んだり、ロータリー子どもの家のプレイルームで一緒に遊んだり、中学生が乳児院にお手伝いに行かせてもらう等なるべくたくさん交流の場を持つるようにしてきました。

しかし交流する機会のある子どもは限られていた為、普段交流の機会の少ない児童養護施設の子とも達も乳児院の小さい子ども達とも一緒に生活する家族としてみんなで交流する機会を持つことが出来るのか、乳児院と児童養護施設の職員が話し合い、バーベキュー大会を企画しました。

子ども達にバーベキュー大会を提案したところ大喜びしていた子どもがほとんどでしたが、中には「小さい子とどうやって遊んでいいかわからん」「ちよつと触って泣かれたらどうしよう」



と乳児院の小さな子どもと関わることへの不安を口にする子どももいました。

バーベキュー当日は開始の1時間前から乳・養職員が準備に取り掛かっていましたが、バーベキューを待ち切れない子どもたちが乳児院からも養護施設からも顔を覗かせており楽しみにしている様子が窺えました。

そしていよいよバーベキューが始まると、養護の子ども達は自分が食べるだけでなく乳児院の小さい子ども達に「お肉おいしいね」「おにぎりとお茶、ここにあげるよ」と優しく話しかけてくれる子どもがたくさんいました。いつもは食事中に注意されることのある子どもも小さい

子どもの前では年長児らしく上手に食べて小さい子どものよきお手本になっていました。

食べ終わった子ども達は庭で一緒に鬼ごっこをしたり、大きい子が小さい子を抱っこしたりと残暑厳しい中ではありましたが、楽しい交流の場になりました。初めは不安を口にしていた子どもも「小さい子がニコニコしながら私の後ろをついて来てたよ」「俺も昔はあんなにかわかったかな」と嬉しそうに話していました。

今後も養護・乳児の子とも達と一緒に遊んだり一緒に何かを作り上げる交流の場を多く持ちながら、神戸真生塾の大家族として共に笑い合い共に成長していけたらと願っています。

(金岡 美衣)



子どものつぶやき

・「お姉ちゃん真生塾に来て何年?」「五年目だよ」
「ふん、ごめんねかあ」

(十二歳・女児)

・ペンキ塗らたての家の前を通った時「うわ、ペンギンのおいがする」

(五歳・男児)

・健康診断を受けるのが不安だと職員が話すと「毎日大きい声出してみんなのこと怒ってるからさつと病気ちゃうわ、大丈夫」

(十歳・女児)

・「昨日外食で何食べたの?」「えっと、スカベツキ、あれスカゲツキ、あれちゃんと言われんようになった!」本当はスパゲッティって言いたかったんだね。

(七歳・女児)

・テラスで花火大会を見ていた時「タケコブターめっちゃ飛んでる」飛んでいたのはヘリコプターだよ。

(十七歳・女児)

・咳が止まらない職員に向かって一言「お姉さんも病気の時だけは静かなな」

(十二歳・男児)

・先生に身長伸びたけどまだのりしおあるって言われた「それは伸びしろだよ。」

(十一才・女児)

・「髪の毛切ったの?」と尋ねると「うん、染めただけ」本当は「揃えただけ」と言いたかったようです。

(七才・女児)

・「ほっぺたが赤くなってるけどどうしたの?」と尋ねると「虫に刺されてたんこぶできてん」虫に刺されて赤く小さく膨らんでいました。

(七才・女児)



高校生トロント交流会

日本キリスト教児童福祉連盟が主催する『第一回高校生トロント交流会』に神戸真生塾から高校三年生の女子Sちゃん・Yちゃんの二名が参加しました。

この交流会はカナダ・トロントにあるアドボカシー事務所を訪問し、現地の若者と交流しながら『子どもの権利条約』について学ぶこと、またホームステイやトロント・ビクトリア大学の学生寮での生活を通して英語やカナダの文化に触れることを目的としたものでした。

今回の交流会の案内をいただいた時に、SちゃんもYちゃんも「カナダに行く」と単純に海外旅行に行くものと思っており、喜んで申込みをしワクワク



しながらパスポートの申請も行いました。

しかしトロントでの交流会のテーマである『子どもの権利条約』についての事前研修会の資料に目を通し、事前研修会に参加して他の施設の子ども達と一緒に勉強会をする中で、今回の交流会が単なる旅行ではなくかなり内容の濃い研修であることを見つけたようでした。

また初めての海外で自分の英語力での程度相手と会話をすることができるとか、食事は口に合うのか、八日間という長い期間カナダで生活する中での文化の違いで困ることはないのかと、出発の数日前から不安が徐々に募り始めていきました。

出発の日、成田空港まで見送りに行った私に「ほんまに大丈夫かな」と何度も不安そうに言いながら搭乗口に向かう二人の様子を見ていて、こちらも不安になりました。

そして八日後、空港まで迎えに行くこと、大きなことをやり遂げた充実感でいっぱいであることがすぐにわかるほど素晴らしき表情の二人がいました。疲れの様子も見せず、カナダでの交



流会の様子やホームステイ先での出来事、研修の合間に訪れたナイアガラの滝について写真を撮らせてくれたながら、ご飯を食べる手が止まるほど二人で次々と話しをしてくれました。

その中でもやはり印象深かったのはアドボカシー事務所での研修だったようです。日本・カナダで施設や里親宅で生活する子ども達の現状を互いに話し合う中で、自分たちが大人に守られながらどのように生きていくべきか真剣に考え合ったよう、自分の生活についてしっかり考えたのは初めてだったと話していました。

神戸真生塾で生活する子ども達には一人一冊ずつ『子どもの権利ノート』が配布され、その内容について一人ずつ時間を取ってきちんと説明してから手

渡しています。今回参加した二人にも手渡していましたが、その内容についてすっかり考えたことはなかったそうです。

しかし今回の交流会でカナダの方々と子どもの権利条約がなぜ出来たのか、何のために必要なのかを一緒に考える中で自分たちが持っている子ども権利ノートの意味についても深く考える機会になったようです。

今回の交流会に参加した二人はたくさんの方々に支えられながらトロントで有意義な時間を過ごし、かけがえのない経験を胸に施設に帰ってきました。今、回学び得た貴重な経験を糧に卒業までの半年を大切に過ごしてもらいたいと願っています。

(金岡 美衣)

子ども達より

☆日本キリスト教児童福祉連盟交流会でカナダに行きました。初めての海外だったので準備が大変でしたが、それ以上にとっても楽しかったです。

カナダのアドボカシー事務所では移民の方々の体験談や人権問題について他の施設の仲間とワークショップを行い話し合いました。

新たな発見もたくさんあり、自分自身の成長を感じられたカナダ研修になったと思います。

(S・Y)

☆初めての海外だったので初めは不安でした。でもカナダでは不安より楽しみの方が大きく、とても充実した時間が過ごせました。

アドボカシー事務所で学んだ子どもの権利の勉強は現地の方から色々な話を聞いてとても印象に残っています。

一番楽しみにしていたナイアガラの滝は船で近くまで行ってみられて良かったです。

高校生活最後の夏に良い思い出が出来ました。

(Y・H)



《乳児院 真生乳児院》

たのしいよ！ 年長児保育

かねてより、職員からの要望が多かった「年長児保育」が今春再開されました。年長児保育は、3歳の未就園児を対象に、生活空間とは違った場所で一人の先生とともに年齢に応じた遊びや行事を大切に保育が計画されています。

また、同法人児童養護施設の未就園児と一緒に年長児保育で過ごしているため、児童養護施設との連携も深まり、さらには養護移行後の連続ケアの一環としても重要な働きを担っています。



★4月から年長児保育に通うようになった3歳のGくん。「人見知りが少し強いから」と心配していましたが、今では「今日ねんちようさん？」と待ちきれない様子で、行く日を楽しみにしています。日々一緒に過ごすグループの中に同年代の男の子がいなのですが、年長児保育では仲良しの男の子の友達ができました。



以前は一人で黙々と遊ぶことの多かったGくんですが、最近では友達と一緒に遊んだり、おしゃべりしたりすることが増えています。また、年下の子が泣いていると「大丈夫やで。」と手を繋いであげる優しい姿を見せられます。とても自信に



★「今日ねんちようさん？」と4歳のYちゃんは待ちきれない様子で毎朝聞いてきます。Yちゃんは手先が器用な事もあり、年長児保育ならではの制作が大好きです。いつも「ねんちようさん、で作った作品を「みてみて！」と目を輝かせ嬉しそうに見せてくれます。とても自信にあふれた表情で職員もそれが楽しみのひとつになっています。

また、年長児保育に通うようになってから積極的に行動する姿が多く見られるようになりました。子ども達の「自分でやってみたい」という思いに柔軟に

「出来た」という経験を増やしていく機会を作っていきたいです。(川口)



馬田あゆみ先生から

一日の流れは、出席シール貼りから始まり、季節の歌を月替わりで歌っています。外遊びでは普段の散歩よりも距離を延ばし、絵の具や制作遊びではひとつの物を作り上げる体験も取り入れていきます。5月には年長児全員で潮干狩りにも行きました。入所クラスでの生活とはまた違い、ルールや決まり事を伝え、友だち同士のやり取りの時間も大切にしながら思いやりの気持ちを育めるよう考えています。

春よりも、季節を一つ重ね、どの子にも大きな成長が感じられます。いろんな場面で「できない」と口にしていた子も、「自分で！」と自信がつき挑戦しようとする姿が見られています。幼稚園就園に向け、どんな成長しているか子どもたちの支えになることができれば、と思います。

すくすく おたより
こあらグループより

こあらグループ(うさぎクラス・きりんクラス)に小さな赤ちゃんがやってきました。新たな出会いを喜び、職員ともども赤ちゃんを迎え入れました。

現在、こあらグループには1歳児が5名おり、よちよち歩きで目の離せない甘えん坊さんばかり。赤ちゃんとの生活に不安も抱えながら子ども達を見守っていると、お気に入りの玩具を赤ちゃんの横にそっと置く姿や、「えーん。えーん。」と言って赤ちゃんが泣いていることを心配そうに伝えてくれる姿など、愛情をうかがえ、子ども達の成長ぶりを頼もしく感じています。

子ども達が日々成長している事を改めて感じつつ、今後も保護者の方と子ども達の成長を共感していきたいと思っています。



※大阪府社会福祉協議会による福祉サービス第三者評価事業を受審しました。受審結果につきましては、全国社会福祉協議会のホームページを「<http://shakyo-hyokanet/>」をご覧ください。

《保育所
真生きりぎりす保育園》

十月の園だより

園長 上杉 徹



先日、神戸市保育士・保育所支援センターの研修にて「□+3=10であれば□の中の答えは一つで「7」となるが□+□=10という問いであれば□の中の答えは複数となります。今の時代、答えは一つとは限らない、正解がなかなか一つに絞きれない問題が多く我々も学生時代の発想から考え方を覚えていかないとけませんね。」という話を聞きまして。特に、人と関わる仕事をする我々の現場ではこの子どもには正解でも他の子どもには正解と言えない関わりがあります。保育園では集団生活ではありますが、一人ひとりの子どもに寄り添った保育計画をたてて保育を行っています。同じ活動の中でも個々の様子をみながら関わり方を変えています。一方、子どもたちは変わらず小学校に就学し中学・高校までの学校教育の中では従来通り問題には必ず一つの答えが有り、○と×で判定されます。しかし、大学生になり専門の学問が始まり、社会人となると答えが複雑となり、正解がなかなか導き出せない課題が出てきます。その時に、保育園時代に培った「やり抜く力」「意欲」「根気」など、大人になって学力を身に付けた際に

答えのない課題に向き合う時に必要な力が発揮されます。一人あそびから、集団あそびに移っていく中で、社会性と共にあそびを通して課題と向き合う力を乳幼児期に保育園で過ごすことによって身に付けています。

人間形成の根っここの部分である乳幼児期の子どもたちを預かる責任の重さを感じつつ、次代を担う子どもたちの成長を見守っていきます。

子どもたちの様子

〜十月の園だよりから〜

【ぶどうぐみ (三歳児)】

暑さもやわらぎ、心地よい風がお部屋の中を通る季節となりました。秋が少しずつ深まってきているある日、いつものように園庭へあそびに行きました。トンボが飛んでいることを目にした子どもたちはトンボと追いかけて遊ぶことを始めました。「待て、まて」と虫取り網ではなく砂場のシャベルを持って追いかけています。「トンボさんいっぱい飛んでいるね。」

とうれしそうに口々に話をしてくれました。日々のあそびの中で子どもたちはたくさん発見をし、色々な学びをしています。9月に入って園庭に居る虫が変化していることを通して季節の変化を感じ取っていた子どもたちでした。

九月に入り、新入園のお友だちも加わり、十二人となったぶどうぐみです。親しみを持って名前を呼び合い、「こっちはだよ」「こうするねんで！」と生活の流れを優しく教えてあげている姿もあります。とても優しい心を持っている子どもたちです。人数も増え、ますますにぎやかになりました。それぞれが自分のことだけでなく人のことを考えて思いやることのできるクラスによりなっていけばいいなと感じています。

十一日には「敬老の日のつどい」があり、近隣のケアセンター「そよ樹」へ訪問に行きました。出し物は「まつぼっくり」の歌の披露と、じゃんけんあそびの『ゲンコツ山のタヌキさん』です。歌う前に本物の「まつぼっくり」触れてみてから、歌うことにしました。実際に触れたことよって歌詞も子どもたちの中にスッと入り込み、ちよつとした時間には子どもたちから「まつぼっくりの歌をうたいたいなあ」という声を聞くことができました。当日も、元氣よく舞台上で歌うことができました。

プレゼントはみかんぐみの子どもたちと一緒に作った「小物入れ」です。みかんぐみが行った「にじみ絵」にぶどうぐみの子どもたちが描いたフルーツを貼り

付けて完成させました。フルーツには「りんご」「もも」「みかん」の中から自分の描きたい物をパスで描き、色も自分で塗りこみました。「りんご」が人気で大半の子どもたちがりんごを描きました。みかんぐみとの協働ですてきなプレゼントが出来上がり、おじいちゃん、おばあちゃんたちへやさしく手渡しにいくことができました。

そして、もう一つ楽しみにしていたイベントにぶどう狩りがありました。あいにくの雨天のため中止となり、残念がっていましたが、昼食で出てきた「ぶどう」を嬉しそうに見つめ、汁でベトベトになりながらも、頑張って皮を自分でむこうとする姿がとても微笑ましく、応援したくなる気持ちにさせられます。

(山口 芽久未・青木 梨花)



神戸真生塾苦情処理委員

苦情受付担当者 久山 啓 (子ども家庭支援センター
ロータリー子どもの家センター長)
森本 みずき (真生きらきら保育園 主任保育士)
網谷 仁志 (神戸市立自立援助ホーム子供の家
主任指導員)

苦情解決責任者 富川 和彦 (児童養護施設 神戸真生塾 施設長)
数田 紀久子(乳児院 真生乳児院 施設長)
上杉 徹 (保育所 真生きらきら保育園 園長)
竹原 裕昭 (神戸市立自立援助ホーム子供の家
施設長)

第三者委員 森光 規之 (当法人 監事)
中村 悦子 (主任児童委員
中央区山手地区民生委員児童委員)

苦情受付件数 平成27年7月より平成27年9月末まで1件

子育てホットライン(相談専用)

TEL:078-341-6493

年中無休午前9時～午後6時

(緊急の場合は夜間も可)

神戸真生塾 子ども家庭支援センター

(ロータリー子どもの家)



**子育てに困ったら
先ず電話相談!**

Homepage <http://www.rotary-kodomoioe.org/>

facebook [http://www.facebook.com/](http://www.facebook.com/rotary.kodomoioe)

rotary.kodomoioe

**子ども家庭支援センター
ロータリー子どもの家**

ベビーマッサージは昨年度から始まり、二か月に一度実施し、これまでに九回、延べ五二組一〇四名の親子が参加されました。本事業は、当センターを「乳児期から利用できる相談機関」として周知してもらいたい。「乳児期から参加できる事業を展開したい」との想いと、神戸真生塾の元職員の方からベビーマッサージの提案があったことがきっかけとなり、始まりました。今年度は、「生駒温子」児童福祉事業助成」から助成を受け、昨年よりも充実した内容を提供できることになりました。さらに、当センターの子育て応援プログラムのひとつとして定着しつつあります。

本事業は、少人数で落ち着いた雰囲気の中で行われ、赤ちゃんが気持ち良さそうにしている姿や、穏やかなお母さんの笑顔をたくさん見ることができ、手のひらから優しいさや愛おしさが伝わっているようでした。本事業は、親子が肌と肌とで触れ合うことのできる、大切なスキンシップのひとつとなつています。当センター実施するベビーマッサージの特色の一つとして、マッサージ終了後に臨床心理士などが入って行う座談会・相談会があります。この座談会・相談会を通じて、当センターの活動を知ってもらおう機会になるだけでなく、月齢の近い子を持つ母親同士の交流、育児の悩みや情報を共有できる場ともなっています。

本事業を機に少しずつではありますが、当センターで実施している他の事業への参加や、日々のちよつとした子育ての悩みなどを気軽に相談できる場につながってきています。これから地域に根ざした活動を心がけていきたいと思っております。



編集後記

秋も深まってまいりました、各事業所共に夏以降の子どもたちの行事の様子を記載させていただきました。それぞれの文章からは可愛らしい子どもたちの姿、たくましく育っていく姿が描かれていたかと思えます。

しかし、戦後七十年の節目の年を迎えたにも関わらず、若者を戦場に送り出しやすくなる動きが進んでいます。過去の戦争を振り返ると多くの犠牲者の中に幼い子どもや戦闘には関係のない女性や高齢者の方々がたくさんいます。一旦、戦争が始まってしまつと、兵士とは関係のない人間も巻き込まれてしまい、被害を受けることになります。そして、格差社会が広がる日本の社会においては貧困層である社会的に弱者として追いやられる子どもと若者が兵士として徴兵される可能性が高くなります。

未来を担う、次代を担う子どもたちの育ちと関わる我々は、戦いではなく話し合いを持って平和を維持することを願わずにはいられません。まさに、神戸真生塾が大切にしている「愛」を持って他の国々の仲間と関わっていくことが求められます。広報誌で描かれている子どもと若者のいのちが輝き続けることを願います。

(上杉 徹)